

スカルピアの言動から彼の過去と性格に関して考察する

16D5・・・ 齋藤那菜

1. 前提

このレポートは、原作のスカルピアの描写には一切触れず、授業内で鑑賞したオペラ「トスカ」におけるスカルピアの描写のみに基づく。

2. サディズムとは

サディズムとは、相手に対して身体的・精神的苦痛を与えることに性的快楽を感じる性質のことである。また、そのような行為を想像して性的快楽を感じることも含む。サディストは、相手に苦痛を与えて嫌がらせることで、相手に対する支配感や優越感を感じる。^[1]

支配感や優越感を強く求める人には、成長過程で他者からの愛情や関心を満足に得られなかった、すなわち小さいころに虐待を受けているなど、つらい過去を持っている人が多い。こうした人々は、他者の顔色を過剰に意識していることがあり、そこから臆病な性格になる。そして、他者からの評価が低いと思ひこみ、自分の中で自分自身が下等な人間だと思ひこむことがある。こうした劣等感が行き過ぎると、他者に対して上に立ちたい、注目してほしい、といったような感情を抱く。こうした感情を抱くことで、サディストたちは弱い自分の心を守ろうとする。^[1]

またサディストは、相手に危害を加えたときに自分に向けられる嫌悪に対して興奮するとも言われている。もともと自分のことを下等な人間だと思ひこんでいる場合、相手からの嫌悪を始めとする自分を否定するような感情に対して不快感を覚えるのではなく、むしろ興奮する。そして、そうした内容で興奮する自分に対しても嫌悪感を抱き、それすら興奮の材料になる。^[1]

こうした自虐的な傾向は、学生がするような「寝てない自慢」や「勉強してない自慢」といった自虐自慢とも似ている。自虐自慢は簡単に周囲の関心を集めることができるため、使う人も多い。私の考えでは、サディストは、自ら相手に嫌われるような行動をとることで相手に嫌悪させ、その嫌悪感をぶつけてもらうことで自分に関心を向けさせている。この考えは、成長過程で関心が不足した人たちがサディストに多いことと合致する。

3. スカルピアの人格

スカルピアは劇中で、相手に媚びを売るのでなく、「力づくで征服する方が味わい深い」と歌っている。相手を力づくで征服するということはつまり、相手の嫌がる様子を見るということである。スカルピアは、トスカを無理や

り屈服させようとしており、彼女から嫌悪感を向けられることに対して喜びを感じていることから、典型的なサディストであるといえる。

サディストの特徴として過剰な支配欲があるが、幼少期の愛情不足によって引き起こされると2.の項で先述した。スカルピアは典型的なサディストであるため、彼も成長過程で愛情が不足していたのかもしれない。また、周囲からの関心が少なかった場合、少しでも関心を集めようと現在の地位につくほどの努力をしたのかもしれない。

「ギターをつま弾いてささやくような真似はしない」という歌詞から、複数の可能性が考えられる。まず、彼が楽器演奏をはじめとする芸術に疎い場合である。この時代の貴族は、芸術をたしなむことは普通のことであり、楽器を習う人もいた。子供のころに芸術を十分にたしなむことがなかった場合、周囲の芸術家に憧れを持つことも考えられる。憧れが劣等感につながった場合、2.の項で述べたように、劣等感を感じさせる相手を虐げることで支配欲を満たしているといえる。また、芸術で成功しているトスカやカヴァラドッシに対しては、他者よりも強い劣等感を感じていたかもしれない。その場合、その劣等感すらサディストである彼の興奮材料であったのかもしれない。もしスカルピアが、幼少期に芸術に触れる機会を得ていたにも関わらず、芸術に対して興味を持てなかったり才能がなかった場合、劣等感はより強いものとなり、上記の傾向も強くなると考えられる。一方で、子供のころに十分な芸術教育を受けていて、かつ芸術を披露する能力もある場合が考えられる。この場合、スカルピアは自身の性格上「ギターをつま弾く」というような行動を好いていないことになる。先述のように、この時代の貴族は芸術をたしなむことは普通のことであった。それにも関わらず芸術を否定するような感情を抱くスカルピアは、周囲と違うことに対して劣等感を感じていたとも考えられる。そしてトスカやカヴァラドッシは、彼が評価していない芸術で周囲から評価されている。この場合においても、トスカやカヴァラドッシに対する劣等感は、比較的強いものであると考えられる。

スカルピアが2.に示したような典型的なサディストであるとするれば、私は上の段落について、スカルピアは芸術に関して教育を受けさせてもらったにもかかわらず、実力があまりつかなかつたと考える。まず、スカルピアが貴族の出であることから、社交上芸術教育を全く受けなかったというのは考えにくい。また、スカルピアがサイコパスである可能性がある。この可能性について詳しくは後述するが、サイコパスである場合、他者に共感することが難しい。スカルピアがサイコパスであるならば、共感性の低さから、芸術に対する評価における周囲との違いも気にならないのではないかと考える。スカルピアがトスカに対して強い嗜虐心を抱き、実際に苦しめている様子から、

トスカやカヴァラドッシに強い劣等感を抱いていると考えられる。上記の理由から、もっとも劣等感を強く感じる可能性があるのは、芸術教育を受けていたにもかかわらず、才能がなく、披露できるほど実力がつかなかった場合である。

先ほどスカルピアがサイコパスである可能性について言及した。ここからは、彼がサイコパスであると考え理由を述べる。

彼は、アンジェロッティを見つけられなかったスポレッタを、裁判や熟考を経ずに処刑すると脅していた。普通に考えれば、アンジェロッティがカヴァラドッシの屋敷にいるという確証がない状態であったのだから、スポレッタに過失の全てがあるわけではない。それにも関わらずすぐに処刑を{指示}口にしたのは、警視総監という高い地位を利用し、他者を傷つけることで支配欲を満たそうとしたのではないかと考える。またスカルピアは、短絡的に処刑をすることに加え、トスカに精神的苦痛を与えるためにカヴァラドッシに拷問を加えさせたことから、他者の命を脅かすことや苦痛に対して覚えるべき精神的抵抗が弱い。このように他者への共感性や倫理観が極端に欠けている場合、サイコパスに分類されることがある。2012年にオックスフォード大学の心理学者、ケヴィン・ダットンが、イギリスでサイコパスに多い職業を調査した。その結果、最高経営責任者や弁護士など、他者を導いたり頭を使う仕事にサイコパスが多いことがわかった。サイコパスにはIQが高い人が多いという説もあり、表向きは知的かつリーダーの素質がある人間に見えることがこの結果と関係していると考えられる。^[2] この傾向がスカルピアにも当てはまるのだとするならば、劇中ではスカルピアが最高の地位にいたため悪逆非道の支配者という印象だが、もし仮に彼よりも上の立場の人間との接触があるならば、非常に魅力的な部下として本領を発揮していたかもしれない。

サイコパスが生まれる原因についてはまだわかっていないが、先天的なものと後天的なものとの半々ではないか、といわれている。後天的な原因については、サディストになる原因と同様に愛情不足がある。

4. 結論

スカルピアの劇中での言動から、彼がサディストでありサイコパスであると考えられた。そしてこのどちらも、成長過程での愛情不足が原因の1つとして挙げられている。このことから、スカルピアは愛情が不足するような家庭環境で育った。また、歌手や画家であるトスカとカヴァラドッシに対する異常な執着心と嗜虐心は、芸術方面の才能に恵まれなかったことによる劣等感が原因である。

5. 参考文献

[1] ”サディズム”, ”Wikipedia”,

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%BA%E3%83%A0>

6.

[2] “サイコパスの特徴と見分け方”, ”特徴.COM”, <http://tokutyou.com/tokutyou/733>

[3] ”サイコパスとは”, ”こころナビ”, <http://cocoronavi.com/symptom/psychopaths.php>